唐詩新選

陳舜臣

新潮社

唐詩新選

陳舜臣

新潮社

唐詩新選

著者　陳舜臣

平成元年一月二〇日　印刷
平成元年一月二五日　発行　　定価一四〇〇円

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一番地（郵便番号一六二）
電話（編集部）〇三―二六六―五四一一
（業務部）〇三―二六六―五一一一
振替　東京四―八〇八

印刷　大日本印刷株式会社
製本　加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-334707-4　C0098
©Shunshin Chin 1989, Printed in Japan

唐詩新選・目次

冬至から正月 7
立春 20
通俗詩 33
清明 46
牡丹 59
夏の詩 71
採蓮曲 84
七夕 96
中秋 108

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

重陽 120
円載上人 130
涼州詞 142
曲江の秋 155
秋雁 168
杭州刺史 181
詠史 193
金陵懐古 206
梅花 219

盛唐の酒 231
唱和 244
松陵の人たち 258
詠物 271
女流 284
方外 296
あとがき 310
詩人・詩題索引 317

唐詩新選

装画　下保昭

冬至から正月

殷（商）王朝は殷墟の発掘、甲骨文の研究によって、実在したことがすでに証明された。その前の夏王朝は、禹がはじめた中国最初の世襲王朝とされているが、夏墟はまだ発見されていない。最近、夏王朝の遺跡が発見されたという報道が、ときどき流れるが、まだ学問的に立証されていないようだ。

漢の武帝の太初元年（前一〇四）に制定された「太初暦」は、「夏正（かせい）」によったという。実在がまだ確認されていない夏王朝の暦法に従ったというのである。『史記』にも、孔子が夏の暦法が正しい、と述べたことを紹介している。

「夏正」は、冬至を含む月を十一月として、その二ケ月後の月を正月としたものである。「斗柄（北斗星の柄）が初昏に寅の方向を指す月」が正月だが、それを定める基準は冬至であったのだ。

故歳今宵盡　故き歳は今宵尽き
新年明旦來　新しき年は明旦来たる
愁心隨斗柄　愁心は斗柄に随い
東北望春回　東北に春の回るを望む

これは張説（六六七―七三〇）の「欽州守歳」と題する五言絶句である。

月の満ち欠けを一ケ月とする純太陰暦では、太陽暦にくらべて、毎年約十一日すくない勘定になる。それでは農事にも都合が悪いので、太陽の運行も考慮にいれ、二十四の節気をそのメドとした。二十四節気は、もともと「二至二分」の四節気だけであったとする説がある。二至とは夏至と冬至で、二分とは春分と秋分にほかならない。夏至は昼が最も長く、冬至は最も短い日であり、春分と秋分は昼夜の長さが同じなのだ。この二至二分は日をかぞえる節目となるが、なかでも冬至は太陽の運行のスタートとして重要である。翌日から日はしだいに長くなり、夏至は折返し点で、その後、しだいに短くなり、冬至でその極に達する。むかしから、冬至はものごとのはじめとして、正月と似たような行事があった。唐代では、元旦はその前後三日、冬至もその前後三日、すなわち、それぞれ七日休んだのである。

唐代の冬至の祝いを、最もいきいきとえがいたのは円仁の『入唐求法巡礼行記』であろう。唐の人にとっては毎年くり返す年中行事なので、記録するまでもないのである。記録したとしても、大切に保存されなかったにちがいない。日本から唐に着いたばかりの留学僧円仁は、揚

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

州で冬至を迎え、それが珍しいので書きとめたのである。この年の冬至は十一月二十七日だが、前日の項に、

——夜、人は咸な睡らず。本国（日本）の正月、庚申の夜と同じなり。

とあり、二十七日はつぎの通りである。

冬至之節。通俗は各礼賀を致す。俗に住する者は官を拝して冬至節を賀す。相公（揚州大都督李徳裕）に見えて即ち導う、「運（陽ざしの運行）は推移して日は南より長えに至る。伏して惟んみるに相公尊躰万福」と。貴賤の官品（官吏）並びに百姓（庶民）は皆相見て拝賀す。出家者も相見て拝賀す。口に冬至の辞を叙べて互いに相礼拝するなり。俗人は寺に入るも且是の礼あり。衆僧は外国（日本）の僧に対して即ち導う、「今日は冬至節、和尚万福、伝燈絶えずして早く本国に帰り、長えに国師となれ云云」と。各相礼拝し畢って、更に「厳寒（きびしい寒さでございます）」を導う。或る僧は来たって云う、「冬至、和尚万福、学は三学（慧・戒・定）に光き、早く本郷に帰って常えに国師と為れ云云」と。多種の語あり。此の節は惣て並、本国正月一日の節と同じきなり。俗家も寺家も各希膳（祝膳）を儲て百味惣て集まる。前人（面前の人）の楽う所に随って皆賀節の辞あり。道俗は同じく三日を以て期と為して、冬至節を賀す。此の寺家も且三日の供を設け、種々の惣集（ご馳走）あり。

——足立喜六訳——

これは上陸した年――唐の開成三年（八三八）だが、翌年の冬至は山東半島の端の赤山法花院で迎えた。十一月九日にあたる。

九日、冬至節、衆僧は相礼す。辰時、堂前に相礼す。

と、あるだけである。

休暇の長さからでも、冬至は正月なみであったことがわかる。冬至になると、去年の冬至、あるいは数年前の冬至が思い出されたであろう。杜甫は至徳二年（七五七）の冬至、長安の宮廷で、左拾遺の職にあった。その年の正月、安禄山が息子に殺され九月に長安も回復されたので、粛宗は十月に宮殿に帰還した。乱がおさまったという安堵感があり、宮廷は喜びに溢れていたはずである。だが翌年六月、杜甫は華州に左遷された。冬至は洛陽で迎えたようだが、思い出されるのは去年のことである。「至日遣興（しじつ・きょうをやる）」と題する詩が二首のこっている。至日とは冬至のことにほかならない。そのうちの第二首をつぎに示そう。

憶昨逍遙供奉班　憶う昨、逍遥せり供奉の班
去年今日侍龍顔　去年の今日　竜顔に侍す
麒麟不動爐烟上　麒麟動かず　炉烟上る
孔雀徐開扇影還　孔雀徐ろに開き扇影還る
玉几由來天北極　玉几、由来、天の北極
朱衣只在殿中間　朱衣、只だ殿中の間に在り

孤臣此日腸堪斷　孤臣　此の日　腸断つに堪え
愁對寒雲雪滿山　愁い寒雲に対すれば雪は山に満つ

皇帝の座所で冬至の拝賀がおこなわれ、去年、杜甫は左拾遺として、皇帝のそば近くに侍っていた。左拾遺は皇帝に意見を述べる官職であり、いわば皇帝の幕僚なのだ。そこに置かれていた香炉は麒麟の彫刻が施されていた。大朝会には孔雀扇百五十六本を用いると、唐の『六典』にみえる。皇帝が坐れば、扇は左右にひらかれる。皇帝は南面するから、その玉座は最も北にあるはずだ。冬至は最も日が短いので、極とか窮といった表現がよく用いられる。朝会には、位階によって着る服が異なる。左拾遺は朱衣であった。殿中のその他大勢の一人であったが、去年はとにもかくにも皇帝のそばにいたのだ。今年は寒ざむとした風景をみて、断腸のおもいである。――

それでも、華州や洛陽は、まだ国の中心部である。その後、杜甫は飢饉をのがれて、はるばる四川まで行く。毎年、冬至は旅人として迎える。去年もそうであったし、その前の年もそうであった。

年年至日長爲客　年年至日　長に客と為り
忽忽窮愁泥殺人　忽忽たる窮愁　人を泥殺す
江上形容吾獨老　江上の形容　吾独り老い

天涯風俗自相親　天涯の風俗 自ら相い親しむ
杖藜雪後臨丹壑　藜を杖し 雪後 丹壑に臨む
鳴玉朝來散紫宸　玉を鳴らし朝来 紫宸に散ぜん
心折此時無一寸　心は折けて此の時一寸も無し
路迷何處是三秦　路迷う 何処ぞ是れ三秦

この詩は「冬至」と題されている。毎年冬至は旅で、いやになるほどのつらい愁いは、人をくたくたにさせる。泥殺の殺は程度の過激なことを意味し、泥はどろどろにすることだ。戦国の屈原は追放され、「顔色憔悴、形容枯槁」と『楚辞』にうたわれている。形容とは顔かたちのことである。天涯――この世のはてまで来ても、その地の風俗にしぜん親しむようになるものだ。老人用の軽いアカザの杖をつき、私は雪の晴れたのち赤い谷に臨んでいる。いまごろ都では玉佩を鳴らしながら、かつての同僚が、朝賀を終え、紫宸殿から退出しているにちがいない。うちひしがれた私の心は一寸の大きさもない。故郷の三秦はどのあたりなのか。そこへ行く路さえわからなくなっている。――

杜甫に「至後」と題する七言律詩がある。至後とは冬至の後のことであり、

冬至至後日初長　冬至 至る後、日初めて長し
遠在劍南思洛陽　遠く劍南に在りて洛陽を思う

と、うたい出されている。剣南とは四川の地名であり、かつては洛陽で長安の宮廷をおもったが、いまでは四川で洛陽が思い出されるのだ。また杜甫には「小至」という題の七言律詩がある。寒食節の翌日を小寒食という用例があるように、小至は冬至の翌日であるらしい。もちろん公休日なのだ。この詩に、「冬至、陽生じ春又た来たる」の句がある。陰暦十、十一、十二月が冬とされていた。十一月の冬至は冬の真最中にあたる。それなのに、日がこれから長くなると思っただけで、春のイメージがうかんでくるのだ。この「小至」のなかにも、つぎのような春を期待する聯が含まれている。

岸容待臘將舒柳　　岸の容は臘を待ちて将に柳を舒べんとし
山意衝寒欲放梅　　山の意は寒を衝きて梅を放たんと欲す

冬至の後の三度目の戌の日が、もともとの「臘」であった。あるいは、戌の日であったともいう。たまたま冬至が戌であれば、その三十日後であり、冬至の翌日が戌であれば二十一日後ということになる。古代では、「社」と「臘」とが二大祝日であり、社は土地の神を祀り、臘はその他もろもろの神を祀る日とされていた。前述のかぞえ方では、毎年、日がちがうことになるので、六朝期に十二月八日または十九日に固定された。時代によって異なるが、清代では十二月八日であった。臘はその前後一日を休むので、三日の連休となる。元正、寒食、冬至の

三大祝日は七日だから、すこし格はさがるが重要な日なのだ。杜甫の時代は、大寒をすぎた辰の日とされていたようだ。陽暦でいえば、一月二十日以後になる。陰暦では、もう正月すれすれだった。つぎは杜甫の「臘日」と題する詩である。

臘日常年暖尚遙　臘日常の年は暖尚お遥かなるに
今年臘日凍全消　今年の臘日　凍は全く消ゆ
侵陵雪色還萱草　雪色を侵陵して萱草還り
漏洩春光有柳條　春光を漏洩して柳条有り
縱酒欲謀良夜醉　酒を縱にして良夜の醉を謀らんと欲し
還家初散紫宸朝　家に還りて初めて紫宸の朝を散ず
口脂面藥隨恩澤　口脂面薬　恩沢に随い
翠管銀罌下九霄　翠管銀罌　九霄に下る

長安時代の作品であり、冬至にはとうぜん朝会があった。『酉陽雜俎』に、

――臘日、口脂臘脂を賜い、盛るに碧鏤牙筒を以てす。

とある。唇がかさかさになり、顔があれる季節なので、皇帝は群臣に口脂面薬を下賜した。クリームのたぐいであろう。それをさまざまな美しい容器に盛った。象牙の筒や銀の罌が使われたらしい。恩賜の品なので、りっぱな器を使わねばならない。萱草は日本ではカヤだが、中

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com